



筑紫女学園大学リポジット

ヤショーヴィジャヤのvyañjanāvagraha解釈とその源泉

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川尻, 洋平, KAWAJIRI, Yohei メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/296

ヤショーヴィジャヤの *vyañjanāvagraha* 解釈とその源泉

川 尻 洋 平

Yaśovijaya's Interpretation of *vyañjanāvagraha* and its Sources

Yohei KAWAJIRI

0. はじめに

インドにおいて、『タルカバーシャー』(*Tarkabhāṣā*) と呼ばれる綱要書は三つある。すなわち、モークシャーカラグプタによる作品、ケーシャヴァミシュラによる作品、ヤショーヴィジャヤ (Yaśovijaya、白衣派、17世紀) の作品である。これらはそれぞれ、仏教、ニヤーヤ学派、ジャイナ教の学説を簡潔にまとめたものであり、前二者については、梶山 [1975] と松尾 [1942] による邦訳がある。『ジャイナ・タルカバーシャー』(*Jainatarkabhāṣā*) についてはこれまで Dr. Dayanand Bhargava の英訳のみがあり邦訳はなかったが、現在宇野智行博士と佐藤宏宗博士が中心となって行われている研究会において全訳が準備されつつある。本稿はその研究会の成果の一部である。

ジャイナ教特有の五知 (jñānapañcaka) に、感官知 (matijñāna)、聖典知 (śrutajñāna)、直観知 (avadhijñāna)、他心知 (manaḥpariyāyajñāna)、独存知 (kevalajñāna) がある¹。これら五知の概念を、アーガマ期から論理期を通して、空衣派や白衣派のさまざまな学匠は、インド論理学の一大潮流であったプラマーナ論の体系に組み換えようと試みた。アーガマ期では、これら五知だけが考察されてきたが、ここに直接知 (pratyakṣa) と間接知 (parokṣa) の概念が導入され、五知はこの直接知と間接知に組み込まれる。『ジャイナ・タルカバーシャー』では、直接知は世間的直接知と究極的直接知に二分される²。五知のうち、感官知と聖典知は前者に、直観知と他心知と独存知は後者に分類される。感官知とは、感官とマナスから生じるものである。この感官知の第一段階として avagraha (感受) がある。さらに avagraha は、vyañjanāvagraha (接触感受) と arthāvagraha (対象感受) に細分される³。

これまで、感官知の第一段階であるavagrahaについては佐藤 [1996、1998b] に詳しく論じられており、本稿は新たな視点や知見を加えるものではない。本稿では、資料蒐集の困難さから佐藤 [1996、1998b] には十分に利用されていなかった文献をも視野に入れて⁴、接触感受に関するジャイナ教の学匠の見解を網羅的に蒐集し、ヤショーヴィジャヤのvyañjanāvagraha解釈の源泉を提示することを目的とする。

1. 感官知の認識過程におけるvyañjanāvagrahaの位置づけ

まず、ジャイナ教認識論において、vyañjanāvagrahaがどのような位置を占めているのかを確認する。五知の一つである感官知が成立する認識過程は次のように考えられている。

感受 (avagraha) → 意欲 (ihā) → 判断 (apāya) → 保持 (dhāraṇā)⁵

このうち、感受にはvyañjanāvagraha (接触感受) とarthāvagraha (対象感受) の二種類があり⁶、この認識過程はさらに細分化される。vyañjanāvagrahaは、arthāvagrahaに先行するので、vyañjanāvagrahaがこの認識過程において第一に起こるものである。ただし、ジャイナ教では、目とマナスは対象に接触せずに働くもの (aprāpyakārin) であるから、両者にvyañjanāvagrahaはない。従って、正確には、眼とマナス以外の四種 (身、舌、鼻、耳) だけに第一段階としてvyañjanāvagrahaが起こり、眼とマナスについては第一段階としてarthāvagrahaが起こる⁷。この認識過程を、目下問題となるvyañjanāvagrahaを除いて説明すれば次のようになる。arthāvagrahaの段階において、存在性すなわち何かが存在していることを把握する。そして、意欲の段階においてその何らかの存在の特殊を探求し、判断の段階において、その特殊を判断し対象の確定知が得られる。そしてそのような確定知を保持する段階へと至るのである。

2. ヤショーヴィジャヤのvyañjanāvagraha解釈

それでは、存在性を把握する以前に起こるvyañjanāvagrahaについてヤショーヴィジャヤがどのような解釈を与えているのかを以下に見ていく。

2.1 『ジャイナ・タルカバーシャー』

はじめに、ヤショーヴィジャヤが『ジャイナ・タルカバーシャー』においてどのような解釈を与えているのかを確認しよう。ヤショーヴィジャヤは、vyañjanāvagrahaという複合語のうち、avagrahaについては次のように述べている。

JTBh 7: avakṛṣṭo grahaḥ avagrahaḥ /

「avagraha (感受) とは低い段階 (avakṛṣṭa) の把握 (graha) である。」

avagrahaとは、低次の認識段階に起こる把握である。このavagrahaは、既に述べたようにvyañjanāvagrahaとarthāvagrahaに分けられるが、後続するarthāvagrahaの段階においてさえ対象の存在性だけを捉えるに過ぎない。次にvyañjanaについては以下のように述べている。

JTBh 7: vyajyate prakāṭikriyate 'rtho 'neneti vyañjanam kadambapuṣpagolakādirūpāṇām antarnirvṛttindriyāṇām śabdādiviṣayaparicchedahetuśaktiviśeṣalakṣaṇam

upakaraṇendriyam, śabdādipariṇatadravyanikurumbam, tadubhayasambandhaś ca/tato vyañjanena vyañjanasyāvagraho vyañjanāvagraha iti madhyamapadalopī samāsaḥ/
「対象を明瞭にする (vyajyate=prakaṭikriyate) 手段が^svyañjanaである。[vyañjanaとは、](1) カダンバの花のような球状のものなどの形をした内的形象感官 (antarnirvṛttindriya)⁸が有する、音声などという対象を決定する原因である特殊な能力を特徴とする実体能力感官 (upakaraṇendriya)⁹であり、(2) 音声などとして変容した実体群であり、(3) それら両者の結びつきである。それゆえ、vyañjanāvagrahaとは、vyañjanaによるvyañjanaについての avagraha (感受) であり、vyañjanāvagrahaという [語] は中間の語を省略した複合語である。」
ここでヤショーヴィジャヤが^svyañjanaという語によって意図しているものは次の三つである。

- (1) 音声などという対象を決定する原因である特殊な能力を特徴とする実体能力感官
- (2) 音声などとして変容した実体群
- (3) 実体能力感官と実体群の結びつき

まずヤショーヴィジャヤは、vyañjanaを「対象を明瞭にする手段」と解釈している。この場合、vyañjanaは感官、特に実体能力感官を意味している。さらにvyañjanaは音声などとして変容した実体群、すなわち対象をも意味している。これは、ヤショーヴィジャヤは明示していないが、vyañjanaを「明瞭にされる対象」とする解釈に基づくものである。さらにヤショーヴィジャヤは、vyañjanaは、それら実体能力感官と実体群との結びつきを意味するものと解釈している。この結びつきとは接触到他ならない。このようにvyañjanaについて、手段、対象、結びつきという三通りのvyañjana解釈を前提に、ヤショーヴィジャヤは、vyañjanāvagrahaという複合語を |vyañjanena vyañjanasya avagrahaḥ| (vyañjanaによる、vyañjanaについての感受) というように分析している。この場合、二度使用されるvyañjanaが三通りのvyañjana解釈のうち、いずれの意味で用いられているのか。ヤショーヴィジャヤの他の著作を考察することによって、それを検討しよう。

2.2 『ジュニャーナールナヴァ』

『ジュニャーナールナヴァ』では、ヤショーヴィジャヤは次のように述べている。

JA II.11 (69) and auto-comm. (f.31b-32a):

tatra dvidhāvagrahaḥ syād vyañjanārthāvalambanaḥ/
tatrendriyārthasāmbandho vyañjanāvagrahaḥ smṛtaḥ//11//69//

tatrāvagrahehāpāyādiṣu matibhedeṣu, avagraho dvididho vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca, tatra prathamopadiṣṭatvād vyañjanāvagrahaḥ prāg nirūpaṇīya ity ata āha tatreti, āha ca “tatthoggaho durūvo gahaṇaṃ jaṃ hojja vaṃjaṇatthāṇaṃ/vaṃjaṇao ya jam attho teṇāie tayaṃ vacchaṃ//VĀBh 192//¹⁰ ” indriyārthasāmbandha iti tatsamayabhāvīti tātparyārthaḥ, yogārtham āha --- svayaṃ vyajyate prakaṭikriyate 'rtho 'neneti vyañjanaṃ, kadambakusumagolakadhānyamasūrakāhālākṣuraprākāramāṃsagolakarūpāṇam

antarnirvṛttindriyāṇāṃ śabdādīviṣayaparicchedahetuśaktiviśeṣalakṣaṇam upakaraṇendriyaṃ śabdādipariṇatadravyanikurambam, tadubhayasaṃbandhaś ca, tatas ca vyañjanenendriyeṇa vyañjanasyārthasya tatsaṃbandhasya vāvagraho vyañjanāvagraha iti madhyamapadalopena samāsa āsrayaṇiyaḥ, arthabhede 'pi padasārūpyeṇaikaśeṣāśrayaṇād, ekaśeṣeṇa vyañjanānām avagraha ity api syāt/āha ca “vaṃjijai jeṇattho ghaḍovva dīveṇa vaṃjaṇaṃ taṃ ca/uvagara ṇiṃdiyasaddāipariṇayaddabbasaṃbandho//VĀBh 193//¹¹” //

「そのうち、感受 (avagraha) は、vyañjanaに基づくものと arthaに基づくものの二種類があるだろう。そのうち、vyañjanāvagrahaは感官と対象との結びつきであると伝承されている。」「そのうち」とは、感受、意欲、判断などという感官知の分類のうち、[という意味である]。avagrahaはvyañjanāvagrahaと arthāvagrahaの二種である。

【反論】 そのうち、最初に提示されたものであるから、vyañjanāvagrahaがまず確定されるべきである。

【答え】 これに対して 'tatra' と述べる。そして、[ジナバドラは次のように] 述べる。『それら[四つの認識過程]のうち、感受は二種である。なぜなら、vyañjanaと arthaについての把握(=感受)があるからである。vyañjana [についての感受]の後に、artha [についての感受]があるので、最初にそれ (vyañjanāvagraha) について述べよう。』と。「感官と対象の結びつき」とは、そのときに生じるもの、という趣旨である。結びつきの意味を [次のように] 述べる。自ずから対象を明瞭にする (vyajyate = prakāṭikriyate) 手段がvyañjanaである。[vyañjanaとは](1) カダンバの花のつばみやマスーラの豆、カーハラーの花、矢じりの形をした肉の塊の形をした内的形象感官 (antarnirvṛttindriya) が有する、音声などという対象を決定する原因である特定の能力を特徴とする実体能力感官 (upakaraṇendriya)、(2) 音声などとして変容した実体群、(3) それら両者の結びつきである。そして、それゆえ、vyañjanāvagrahaとは、vyañjanaすなわち感官による、vyañjanaすなわち対象あるいはそれらの結びつきについての感受である、というように中間の語の消失によって複合語が形成されるべきである。意味が異なるとしても、語の類似性による一残余に依拠するからである。一残余によって諸々のvyañjanaについての感受、という[意味]も起こるだろう。そして[ジナバドラは次のように] 述べる。『vyañjanaとは、壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段である。そして、その[vyañjana]は、実体能力感官 (upakaraṇendriya) と音声などとして変容した実体との結びつきである』と。」

ここで説明されているvyañjanaの三解釈は、『ジャイナ・タルカパーシャー』に与えられている解釈と同様であるが、vyañjanaを「結びつき」とする解釈の根拠として、ジナバドラの『ヴィシェーシャーヴァシュヤカバーシャ』(Viśeṣāvaśyakabhāṣya) を引用している点は注目されるべきである。また、vyañjanāvagrahaの分析についても{vyañjanena vyañjanasya avagrahaḥ}というように、『ジャイナ・タルカパーシャー』の解釈と同様であるが、ここではvyañjanaの指示内容が明示されている。その解釈は次の通りである。

- (a) 感官 (vyañjana) による、対象 (vyañjana) についての感受 (avagraha)
- (b) 感官 (vyañjana) による、感官と対象との結びつき (vyañjana) についての感受

2.3 『ジュニャーナビンドウ』 (Jñānabindu)

ヤショーヴィジャヤは『ジュニャーナビンドウ』(Jñānabindu)において次のように述べている。
 JB p.10: tatra avagraho dvididho vyañjanāvagrahārthāvagrahabhedāt / tatra vyañjanena śabdādipariṇatadravyanikurambeṇa vyañjanasya śrotrendriyāder avagrahaḥ sambandho vyañjanāvagrahaḥ /

「そのうち、avagrahaは、vyañjanāvagrahaとarthāvagrahaという違いに基づいて二種である。そのうち、vyañjanāvagrahaとは、vyañjanenaすなわち音声などとして変容した一群の実体と、vyañjanasyaすなわち聴覚感官などとの結びつき (avagraha=sambandha) である。」

ここでも『ジャイナ・タルカパーシャー』同様に、ヤショーヴィジャヤがvyañjanāvagrahaを |vyañjanena vyañjanasya avagrahaḥ|と分析していることは明らかである。しかし、ここで注目されるべきは、佐藤 [1998] には指摘されていないが、ヤショーヴィジャヤがavagrahaを「結びつき」(sambandha) と解釈している点である。ここでは、vyañjanaは、「感官」と「対象」とを意味しているに過ぎず、vyañjanaが「結びつき」を意味するとは解釈していない。『ジャイナ・タルカパーシャー』では低次の段階の把握、すなわち感受を意味したavagrahaが、『ジュニャーナビンドウ』では「結びつき」として解釈されている。したがって、ここでヤショーヴィジャヤが意図しているvyañjanāvagraha解釈は次の通りである。

- (c) 対象 (vyañjana) と感官 (vyañjana) との結びつき (avagraha)

2.4 『タットヴァールターストラ・ヴィヴァラナ』 (Tattvārthasūtravivaraṇa)

最後に、空衣派と白衣派の両派が権威を認めるウマースヴァーティ (5-6世紀) の『タットヴァールターストラ』(Tattvārthasūtra) に対するヤショーヴィジャヤの注釈『タットヴァールターストラ・ヴィヴァラナ』(Tattvārthasūtravivaraṇa) を検討する。

ウマースヴァーティは『タットヴァールターストラ』において、次のように述べる。

TAAS 1.18: vyañjanasya avagrahaḥ /

「vyañjanaについて感受がある。」

TAASBh: vyañjanasyāvagraha eva bhavati nehādayaḥ /

「vyañjanaについては、感受だけがあって、[vyañjanaについて] 意欲などはない。」

ウマースヴァーティが、vyañjanaについて、どのような意味で使用しているのかはこれだけでははっきりしないが、ある種の対象としてみなしていると考えられるであろう。

2.4.1 『タットヴァールターストラ』 1.18に対する空衣派学匠の解釈

ヤショーヴィジャヤの解釈を検討する前に、空衣派の学匠によって、このウマースヴァーティ

の言明がどのように解釈されてきたのかを先行研究をもとに簡単に概観しよう¹²。まずプージュヤパーダ (Pūjyapāda、空衣派、6世紀) は次のように述べている。

SAS p.83: vyañjanam avyaktaṃ śabdādijātaṃ tasyāvagraho bhavati nehādayaḥ /

「vyañjanaすなわち判然としない、一群の音声など、それについて感受があるのであって、
[vyañjanaについて] 意欲などはない。」

さらにアカランカ (Akalaṅka、空衣派、8世紀) は次のように述べている。

TAV p.66: vyañjanam avyaktaṃ śabdādijātaṃ tasyāvagraho bhavati /

「vyañjanaすなわち判然としない、一群の音声など、それについて感受がある。」

空衣派の学匠であるプージュヤパーダとアカランカはともに、vyañjanaを「判然としないもの」(avyakta) であり、「一群の音声など」(śabdādijāta) と解釈している。このことから、両者は、音声などの実体あるいは対象として解釈していることは明瞭である。

2.4.2 ヤショーヴィジャヤ解釈

以上の空衣派の学匠の解釈に対して、白衣派の学匠であるヤショーヴィジャヤは、『タットヴァールターストラ・ヴィヴァラナ』において、次のように述べている。

TASVi on TAS 1.18: vyañjanam upakaraṇendriyasparśādyākārapariṇatadravyasambandhas
tasyāvagraha evaiko bhavati /

「vyañjanaすなわち実体能力感官と触などとして変容した実体との結びつき、それには感受だけが唯一ある。」

ヤショーヴィジャヤは、ここでvyañjanaを感官と対象との「結びつき」と解釈している。『ジャイナ・タルカパーシャー』や『ジュニャーナールナヴァ』に見られるような三通りの解釈はここでは見られない。vyañjanaを「結びつき」と解釈する以上、avagrahaも「結びつき」と解釈されることはないであろう。したがって、『タットヴァールターストラ・ヴィヴァラナ』を援用すれば、vyañjanāvagrahaは次のように解釈されうるであろう。

(b) 感官と対象との結びつき (vyañjana) についての感受

この解釈は、『ジュニャーナールナヴァ』に見られる解釈 (b)、すなわち「感官による、感官と対象との結びつきについての感受」の一種とみなすことができるであろう。

3. vyañjanāvagraha解釈の変遷

以上のように、vyañjanāvagrahaは多様な解釈が可能な複合語であることは明らかである。それでは、これらのヤショーヴィジャヤの解釈はジャイナ教のどの文献にまで遡ることができるのか、あるいはヤショーヴィジャヤの独創によるものなのか、その源泉について以下に検討する。

それでは、ジャイナ教の伝統の中でどのようにvyañjanāvagrahaが解釈されてきたのかを網羅的に以下に提示する。

[Jinabhadra、白衣派]

VĀBh 192-193:

tatthoggaho dubheto gahaṇaṃ jaṃ hojja vaṇjaṇatthāṇaṃ /
vaṃjaṇato ya jaṃ attho teṇātie tayaṃ vocchaṃ // 192 //
[tatrāvagraho dvibhedaḥ grahaṇaṃ yat bhavet vyañjanārthayoḥ /
vyañjanataś ca yad arthaḥ tenādu tad vakṣye //]
vaṃijjai jeṇattho ghaḍo vva diveṇa vaṃjaṇaṃ taṃ ca /
upakaraṇindiyasaddātipariṇatadavvasaṃbandho // 193 //
[vyajyate yenārtho ghaṭa iva dīpena vyañjanaṃ tac ca /
upakaraṇendriyaśabdātipariṇatadravyasaṃbandhaḥ //]

「それら [四つの認識過程] のうち、感受は二種である。なぜなら、vyañjanaとarthaについての把握 (= 感受) があるからである。vyañjana [についての感受] の後に、artha [についての感受] があるので、最初にそれ (vyañjanāvagraha) について述べよう。vyañjanaとは、壺を [明瞭にする] 灯火のように、対象を明瞭にする手段である。そして、その [vyañjana] は、実体能力感官 (upakaraṇendriya) と音声などとして変容した実体との結びつきである。」

VĀBhSV on VĀBh 192-193: tatra dvididho 'vagrahaḥ vyañjanasya arthasya ca, anyasyāvagrāhyasyābhāvāt / --- / iha vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa iti vyañjanam, tac copakaraṇendriyasya śabdātipariṇatadravyāṇaṃ ca yaḥ saṃbandhaḥ saṃpṛktir ity arthaḥ / vyañjanāvagraha ity atra cobhayasamāsāvadhāraṇaṃ draṣṭavyam --- vyañjanena upakaraṇendriyeṇa śabdātipariṇatadravyāṇaṃ vyañjanānām avagraho vyañjanāvagrahaḥ //

「それら [四つの認識過程] のうち、感受は二種である。vyañjanaについての [感受] と arthaについての [感受] とである。なぜなら、[これらvyañjanaとarthaの二つ] 以外の感受の対象は存在しないからである。(略) この [我々の体系] では、vyañjanaとは、壺を [明瞭にする] 灯火のように、対象を明瞭にする手段である。そして、その [vyañjana] は、実体能力感官と音声などとして変容した実体群との結びつきすなわち接触 (saṃpṛkti) である、という意味である。そしてvyañjanāvagrahaというこの [語] において、両方の複合語の制限 (ubhayasamāsāvadhāraṇa) が理解されるべきである。vyañjanaすなわち実体能力感官によるvyañjanaすなわち音声などとして変容した実体群についてのavagraha (感受) が、vyañjanāvagrahaである。」

[Jinadāsagaṇi Mahattara、白衣派]

NSC on NS 49:

vaṃjaṇāṇaṃ avaggaho vaṃjaṇāvaggaho, ettha vaṃjaṇaggahaṇeṇa saddāipariṇatā davvā ghattavvā / vaṃjaṇe avaggaho vaṃjaṇāvaggaho, ettha vaṃjaṇaggahaṇeṇa

davviṃḍiyam ghattavvam / etesiṃ doḥḥa vi samāsāṇam imo attho jeṇa karaṇabhūteṇa attho vaṃḍijjai taṃ vaṃḍaṇam, jahā padiveṇa ghaḍo / evaṃ saddāḍipariṇatehiṃ davvehiṃ uvakaraṇiṃḍiyapattehiṃ cittehiṃ saṃbaddhehiṃ saṃpasattehiṃ jamhā attho vaṃḍijjai tti tamhā te davvā vaṃḍaṇāvaggaho bhaṇṇati / esa vaṃḍaṇāvaggaho suttasiddho catuvviho / 「vyañjanāvagrahaとはvyañjanaについてのavagrahaである。この場合、vyañjanaの言及によって、音声などとして変容した実体が理解されるべきである。vyañjanāvagrahaとはvyañjanaによるavagrahaである。この場合、vyañjanaの言及によって、実体感官(dravyendriya)が理解されるべきである。[解釈が]二つあるとしても、これらの複合語の意味は次の通りである。対象を明瞭にする手段、それがvyañjanaである。たとえば、壺を[明瞭にする手段である]灯火のように。以上のような場合、音声などとして変容し、実体能力感官が接触している実体と結びついた(sambaddha = samprasakta)これら[実体感官]によって、明瞭にされる対象が[vyañjana]であるから、それら[vyañjana]は実体である。[かくして、vyañjanaによるvyañjanaについてのavagrahaが、]vyañjanāvagrahaと呼ばれるものである。」

[Haribhadra、白衣派]

ĀNHV on ĀN3: sa ca dvidhā --- vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca, tatra vyañjanāvagrahapūrvakatvād arthāvagrahasya prathamam vyañjanāvagrahaḥ pratipādyata iti / tatra vyañjanāvagraha iti kaḥ śabdārthaḥ, ucyate, vyajyate 'nenārthaḥ pradipeneva ghaṭa iti vyañjanaṃ, tac ca upakaraṇendriyam śabdāḍipariṇatadravyasaṃghāto vā, tataś ca vyañjanena upakaraṇendriyeṇa śabdāḍipariṇatadravyāṇam ca vyañjanānam avagraho vyañjanāvagraha iti /

「そして、その[感受]は二種である。すなわち、vyañjanāvagrahaと対象感受とである。そのうち、対象感受はvyañjanāvagrahaに後続するものであるから、まずvyañjanāvagrahaが説明される。以上。そのうち、vyañjanāvagrahaという語の意味は何なのか。答える。vyañjanaとは、壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段である。そして、その[vyañjana]は、実体能力感官あるいは音声などとして変容した実体群である。そして、それゆえ、vyañjanaすなわち実体能力感官によるavagraha(感受)と音声などとして変容した実体群についてのavagraha(感受)がvyañjanāvagrahaである。以上。」

NSHV on NS 49: atha ko 'yam avagrahaḥ, avagraho divividhaḥ prajñaptaḥ, tad yathā --- arthāvagrahaś ca vyañjanāvagrahaś ca / --- / vyajyate 'nenārthaḥ pradipeneva ghaṭa iti vyañjanam, tac copakaraṇendriyam śabdāḍipariṇatadravyasaṃghāto vā, tataś ca vyañjanena upakaraṇendriyeṇa vyañjanānam śabdāḍipariṇatadravyāṇam avagraho vyañjanāvagrahaḥ / 【反論】この感受とは何か。

【答論】二種類の感受が定められている。すなわち対象感受と vyañjanāvagraha とである。(略)壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段が、vyañjana である。そして、その [vyañjana] は実体能力感官あるいは音声などとして変容した実体集合である。そしてそれゆえ、vyañjana すなわち実体能力感官による vyañjana 音声などとして変容した実体群についての感受が vyañjanāvagraha である。】

TASHV on TAS I.18 (p.69) : vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa itī vyañjanam, tac copakaraṇendriyaśabdādirīṇatadravyasaṃśleṣarūpaṃ, tathā cāha bhāṣyakāraḥ --- “vaṃjijjai jeṇattho ghaḍovva dīveṇa vaṃjaṇaṃ taṃ ca / uvakaraṇiṃḍiasaddāipariṇāo davvasaṃbaṃdho // (VĀBh 193)” ityādi, tasya vyañjanasya saṃśleṣarūpasyāvagraha evaiko bhavati/

「壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段が vyañjana である。そしてその [vyañjana] は、実体能力感官と音声などとして変容した実体との接触を本質とするものである。そしてそのような場合、パーシャ作者は vaṃjii.. などと述べる。その接触を本質とする vyañjana については感受だけが唯一存在する。」

[Siddhasena Gaṇi、白衣派]

TASṬ on TAS I.18 (pp.86-87) : tatra vyajyate 'nenārtha itī vyañjanam santamasāvasthita-ghaṭarūpapradīpādīvat, tat punar vyañjanam saṃśleṣarūpaṃ yad indriyāṇām sparśanādīnām upakaraṇākhyānām sparśādyākāreṇa pariṇātānām pudgaladravyāṇām ca, yaḥ parasparaṃ saṃśleṣas tad vyañjanam, tasya vyañjanasyāvagraha evaiko bhavati grāhakaḥ /

「そのうち、vyañjana とは、対象を明瞭にする手段である。真っ暗な所にある壺の形を[明瞭にする]灯火などのように。さらにその vyañjana は接触を本質とするものであり、それは触覚などの実体能力感官と呼ばれる諸感官と、触などの形で変容したブドガラという実体群との間の [vyañjana すなわち接触を本質とするものである]。相互接触、それが vyañjana である。その vyañjana に対して感受だけが、唯一把捉するものとして存在する。」

[Abhayadeva、白衣派]

SthAV on SthA 60 (II.1) : tathā vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa itī vyañjanam, tac copakaraṇendriyam śabdāditvaparīṇatadravyasaṅghāto vā, tataś ca vyañjanena upakaraṇendriyeṇa śabdāditvaparīṇatadravyāṇām vyañjanānām avagraho vyañjanāvagraha itī, atha vā vyañjanam indriyaśabdādiravyasaṃbandhaḥ āha ca --- “vaṃjijjai jeṇattho ghaḍo vva dīveṇa vaṃjaṇaṃ to taṃ / uvagaraṇiṃḍiyasaddāipariṇāyadavvasaṃbaṃdho // (VĀBh 193)” tti /

「さらに、壺を〔明瞭にする〕灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaである。そして、その[vyañjana]は実体能力感官あるいは音声などとして変容した実体の集合である。そしてそれゆえ、vyañjanaすなわち実体能力感官による、vyañjanaすなわち音声などとして変容した実体についての感受がvyañjanāvagrahaである。以上。あるいは、vyañjanaは感官と音声などの実体との結びつきである。そして〔バーシャ作者は〕vaṃjijai云々と述べている。』

[Maladhāri Hemacandra、白衣派]

VĀBhBV on VĀBh 194 : vyajyate prakāṭikriyate 'rtho yena, dipeneva ghaṭaḥ, tad vyañjanam / kiṃ punas tat, ity āha ---- 'taṃ cetyādi' tac ca vyañjanam upakaraṇendriyaśabdādipariṇatadravyasaṃbandhaḥ / ---- / upakaraṇendriyaṃ ca śabdādipariṇatadravyāṇi ca, teṣāṃ parasparaṃ saṃbandha upakaraṇendriyaśabdādipariṇatadravyasaṃbandhaḥ, eṣa tāvad vyañjanam ucyate / aparaṃ cendriyeṇāpy arthasya vyajyamānatvād tad api vyañjanam ucyate / tathā śabdādipariṇatadravyanikurambam api vyajyamānatvād vyañjanam abhidhīyata iti / evam upalakṣaṇavyākhyānāt tritayam api yathoktaṃ vyañjanam avagantavyam / tataś cendriyalakṣaṇena vyañjanena śabdādipariṇatadravyasaṃbandhasvarūpasya vyañjanasyāvagrho vyañjanāvagrahaḥ, atha vā tenaiva vyañjanena śabdādipariṇatadravyātmakānāṃ vyañjanānām avagraho vyañjanāvagrahaḥ, ity ubhayatrāpy ekasya vyañjanaśabdasya lopaṃ kṛtvā samāsaḥ /

「壺を〔明瞭にする〕灯火のように、対象を明瞭にする（vyajyate = prakāṭikriyate）手段、それがvyañjanaである。さらにそれは何なのか、ということに 'taṃ ca' 云々と答える。そして、そのvyañjanaは実体能力感官と音声などとして変容した実体との結びつきである。（略）実体能力感官と音声などとして変容した実体群、それらの相互の結びつきとは、実体能力感官と音声などとして変容した実体との結びつきである。まずもって、この〔結びつき〕がvyañjanaといわれる。さらに感官によっても、対象は明瞭にされていることから、その〔感官〕もvyañjanaといわれる。さらに、音声などとして変容した実体集合もまた明瞭にされていることから、vyañjanaと言われる。以上。以上のように、提喩法を通じた説明に基づいて、三つのいずれもが述べられたようにvyañjanaと理解されるべきである。そしてそれゆえ、感官を特徴とするvyañjanaによる、音声などとして変容した実体との結びつきに他ならないvyañjanaについての感受が、vyañjanāvagrahaである。あるいは、まさにその同じ〔感官を特徴とする〕vyañjanaによる、音声などとして変容した実体に他ならないvyañjanaについての感受が、vyañjanāvagrahaである。このようにいずれの場合においても、〔vyañjanāvagrahaという語は〕一方のvyañjanaという語の消失を考慮した複合語である。』

JSV on JS62 : avagraho dvidhā vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca / tatra vyajyate

prakaṭīkriyate śabdādir artho 'neneti vyañjanam / kiṃ tat, ucyate / upakaraṇendriyasya kadambapuṣpādyaḥkrteḥ śrotraghrāṇarasanasparśanalakṣaṇasya śabdagandharasasparśa-pariṇatadravyāṇaṃ ca yaḥ parasparaṃ saṃbandhaḥ --- prathamam upaśleṣamātram tad iha vyañjanam ucyate / aparāṃ cendriyeṇāpy arthasya vyajyamānatvāt tad apīndriyam iha vyañjanam abhipretam / tatas ca vyañjanena indriyalakṣaṇena vyañjanasya viśaya-saṃbandhalakṣaṇasyāvagrahaṇaṃ paricchedanaṃ --- ekasya vyañjanaśabdasya lopād vyañjanāvagrahaḥ / kim apīdam ity avyaktajñānarūpād vakṣyamāṇārthāvagrahād apy adho 'vyaktatarajñānamātram ity arthaḥ /

「感受は、vyañjanāvagrahaと対象感受の二種である。そのうち、vyañjanaとは、音声などという対象を明瞭にする手段である。

【反論】それは何なのか。

【答論】答える。カダンバの花などのような形をした耳、鼻、舌、身を特徴とする〔実体形象感官 (nirṛtīndriya)〕が有する実体能力感官と音声、香り、味、触として変容した実体群の相互の結びつき、すなわち第一に接触そのもの (upaśleṣamātra)、それがこの〔体系〕ではvyañjanaと言われる。さらに、感官によっても対象が明瞭にされていることから、その〔感官〕もこの〔体系〕ではvyañjanaであると意図されている。そして、それゆえ、感官を特徴とするvyañjanaによる、対象との結びつきを特徴とするvyañjanaについての感受、すなわち断定 (pariccheda) がvyañjanāvagrahaである。一方のvyañjanaという語の消失に基づいているからである。「これは何かしらのものである」というように判然としない知を本質とするものであるから、これから述べられる対象感受よりも下位のより判然としない知そのものである、という意味である。」

[Malayagiri、白衣派]

NSMV on NS27 (f.168b) : sūrir āha --- avagraho dvidvidhaḥ prajñaptaḥ, tad yathā arthāvagrahaś ca vyañjanāvagrahaś ca / --- / tathā vyajyate anenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa itī vyañjanaṃ, tac copakaraṇendriyasya śrotrādeḥ śabdādīpariṇatadravyāṇaṃ ca parasparaṃ saṃbandhaḥ, sambandhe hi sati so 'rthaḥ śabdādirūpaḥ śrotrādīndriyeṇa vyañjayitum śakyate, nānyathā, tataḥ saṃbandho vyañjanaṃ ca, tathā cāha bhāṣyakṛt --- “vaṃjijai jeṇa'ttho ghaḍo vva dīveṇa vaṃjanaṃ taṃ ca / uvakaraṇīṃdiyasaddāi pariṇayadavvasaṃbandho // (VĀBh 193)” vyañjanena saṃbandhenāvagrahaṇaṃ saṃbadhyamānasya śabdādirūpasyārthasyāvvyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ, atha vā vyajyante itī vyañjanāni, “kṛd bahulam” itī vacanāt karmaṇy anaḥ, vyañjanānāṃ śabdādirūpatayā pariṇatānāṃ dravyāṇaṃ upakaraṇendriyasamprāptānāṃ avagrahaḥ --- avyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ, (f.169a) vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa itī vyañjanaṃ upakaraṇendriyaṃ tena svasaṃbaddhasyārthasya śabdāder

avagrahaṇam --- avyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ /

「スーリは次のように述べる。二種類の感受が定められている。すなわち、対象感受と vyañjanāvagraha である。(略) さらに、壺を [明瞭にする] 灯火のように、対象を明瞭にする手段が、vyañjana である。そして、その [vyañjana] は、聴覚感官などの実体能力感官と音声などとして変容した実体群との結びつきである。なぜなら、結びつきが存在する場合、その音声などという対象は聴覚感官などによって明瞭にされうるからである。別の仕方では [明瞭にされえ] ない。それゆえ、結びつきという vyañjana でもある。そしてそのような場合、バーシャ作者は、vaṃjjai 云々と述べる。結びつきという vyañjana による感受、すなわち結びついている音声などという対象についての判然としない形での断定が、vyañjanāvagraha である。あるいは、vyañjana とは明瞭にされるものである。「kṛd 接辞は多様な意味で導入される」(kṛd bahulam) という言明に基づいて目的の意味で接辞 anaṭ が導入されている。vyañjana すなわち音声などとして変容し、実体能力感官に接触した実体についての感受、すなわち判然としない形での断定が vyañjanāvagraha である。壺を [明瞭にする] 灯火のように、対象を明瞭にする手段が vyañjana である。[その vyañjana は] 実体能力感官である。それによる、[感官] 自身と結びついている音声などの対象についての感受、すなわち判然としない形での断定が vyañjanāvagraha である。」

ĀNMV on ĀN 3 (f.23b) : sa ca dvidhā --- vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca, tatra vyañjanāvagrahapūrvako 'rthāvagraha iti prathamam vyañjanāvagrahaḥ pratipādyate, atha vyañjanāvagraha iti kaḥ śabdārthaḥ, ucyate, vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa iti vyañjanam, tac copakaraṇendriyasya śabdādīpariṇatadravyāṇam ca yaḥ parasparam sambandhaḥ, samprkṛtir ity arthaḥ, sambandhe hi sati so 'rthaḥ śrotrādīndriyeṇa vyaktum śakyate nānyathā, tataḥ sambandho vyañjanam, tathā cāha bhāṣyakṛt --- “vaṃjjai jeṇa'ttho ghaḍovva dīveṇa vaṃjāṇam taṃ ca / uvagaraṇiṃdiyasaddāipariṇayadavvasambandho // 1 //” vyañjanena --- sambandhenāvagrahaṇam --- sambadhyamānasya śabdādirūpa-syārthasyāvyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ, atha vā vyajyante iti vyañjanāni, “kṛd bahulam” iti vacanāt karmaṇy anaṭ, vyañjanānām --- śabdādirūpatayā pariṇatānām dravyāṇām upakaraṇendriyasamprāptānām avagrahaḥ --- avyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ, atha vā vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa iti vyañjanam --- upakaraṇendriyam tena svasambaddhasyārthasya śabdāder avagrahaṇam --- avyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ /

「そしてその [感受] は二種である。vyañjanāvagraha と対象感受とである。そのうち、対象感受は vyañjanāvagraha に後続するものである。したがって、まず vyañjanāvagraha が説明される。

【反論】 vyañjanāvagraha という語の意味は何か。

【答論】答える。壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaである。そして、その[vyañjana]は、実体能力感官と音声などとして変容した実体との相互の結びつきである。すなわち接触という意味である。なぜなら、結びつきが存在する場合、その対象は聴覚感官などによって明瞭にされうるからである。別の仕方では[明瞭にされえ]ない。それゆえ、vyañjanaは結びつきである。そしてそのような場合、バーシャ作者はvaṃṣijai云々と述べる。結びつきというvyañjanaによる感受、すなわち結びついている音声などという対象についての判然としない形での断定が、vyañjanāvagrahaである。あるいは、vyañjanaとは明瞭にされるものである。「kṛt接辞は多様な意味で導入される」という言明に基づいて目的の意味で接辞anaṭが導入されている。vyañjanaすなわち音声などとして変容し、実体能力感官に接触した実体についての感受、すなわち判然としない形での断定がvyañjanāvagrahaである。あるいは、壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaすなわち実体能力感官である。それによる、[感官]自身と結びついている音声などの対象についての感受、すなわち判然としない形での断定がvyañjanāvagrahaである。」

DhSṬ on DhS823 (f.294a) : tatrāvagraho dvidhā, vyañjanāvagrahaḥ arthāvagrahaś ca / tatra vyajyate 'rtho 'nena pradipeneva ghaṭa iti vyañjanam --- upakaraṇendriyaṃ tena vyañjanenopakaraṇendriyeṇāvagrahaḥ prāptānāṃ śabdādipariṇatadravyāṇām avyaktaṃ jñānamātraṃ vyañjanāvagrahaḥ /

「そのうち、感受は二種である。vyañjanāvagrahaと対象感受とである。そのうち、壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaすなわち実体能力感官である。その実体能力感官というvyañjanaによる感受、すなわち[感官に]接触した音声などとして変容した実体についての判然としない単なる知がvyañjanāvagrahaである。」

[Tilakācārya、白衣派]

ĀNTV on ĀN3 (ĀNAvacūrṇi, Pariśiṣṭa 2) : sa ca dvidhā --- vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca, vyajyate 'nenārthaḥ pradipeneva ghaṭa iti vyañjanam --- dravyendriyaṃ kadambapuṣpākārādi śabdādipariṇatadravyasaṃghātaś ca / tato vyañjanena dravyendriyeṇa śabdādipariṇatadravyāṇām vyañjanānām avagraho vyañjanāvagrahaḥ /

「そして、その[感受]は二種である。vyañjanāvagrahaと対象感受とである。壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaである。すなわち、カダンバの花などのような形をした実体感官と音声などとして変容した実体群とである。それゆえ、vyañjanaすなわち実体感官による、vyañjanaすなわち音声などとして変容した実体についての感受がvyañjanāvagrahaである。」

[Jñānasāgara Sūri]

ĀNAva on ĀN 3 (p.21) : sa dvidhā --- vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca / tatra vyañjanāvagrahapūrvako 'rthāvagraha iti prathamam vyañjanāvagrahaḥ pratipādyate / vyajyate 'nenārthaḥ pradīpeneva ghaṭa iti vyañjanam, tac copakaraṇendriyasya śabdādipariṇatadravyāṇām ca yaḥ parasparam sambandhaḥ samprkṭir ity arthaḥ, sambandhe hi sati so 'rthaḥ śrotrādindriyeṇa vyaktum śakyate nānyathā, tataḥ sambandho vyañjanam, vyañjanena --- sambandhenāvagrahaṇam --- sambadhyamānasya śabdādirūpa-syārthasyāvvyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagraha iti / atha vā vyajyante iti vyañjanāni karmaṇy anaḥ, vyañjanānām --- śabdādirūpatayā pariṇatānām dravyāṇām upakaraṇendriyasamprāptānām avagrahaḥ --- avyaktarūpaḥ paricchedo vyañjanāvagrahaḥ, atha vā vyañjanam upakaraṇendriyam śabdādipariṇatadravyasaṅghāto vā / tatas ca --- vyañjanenopakaraṇendriyeṇa śabdādipariṇatadravyāṇām ca vyañjanānām avagraho vyañjanāvagrahaḥ /

「その[感受]は二種である。vyañjanāvagrahaと対象感受とである。そのうち、対象感受は、vyañjanāvagrahaに後続するものである。したがって、まずvyañjanāvagrahaが説明される。壺を[明瞭にする]灯火のように、対象を明瞭にする手段がvyañjanaである。そして、その[vyañjana]は、実体能力感官と音声などとして変容した実体との相互の結びつきである。すなわち接触という意味である。なぜなら、結びつきが存在する場合、その対象は聴覚感官などによって明瞭にされうるからである。別の仕方では[明瞭にされえ]ない。それゆえ、vyañjanaとは結びつきである。結びつきというvyañjanaによる感受、すなわち結びついている音声などという対象についての判然としない形での断定が、vyañjanāvagrahaである。あるいは、vyañjanaとは明瞭にされるものである。目的の意味で接辞anaḥが導入されている。vyañjanaすなわち音声などとして変容し、実体能力感官に接触した実体についての感受、すなわち判然としない形での断定がvyañjanāvagrahaである。あるいはvyañjanaとは、実体能力感官もしくは音声などとして変容した実体群である。そしてそれゆえ、vyañjanaすなわち実体能力感官によるavagraha（感受）と、vyañjanaすなわち音声などとして変容した実体群についてのavagraha（感受）がvyañjanāvagrahaである。」

[Māṅikyaśekhara Sūri]

ĀND on ĀN 3 (f.10b) : sa dvidhā vyañjanāvagraho 'rthāvagrahaś ca / tatra vyañjanānām śabdādidravyāṇām upakaraṇendriyaprapṭānām avagraho 'vyaktam grahaṇam vyañjanāvagrahaḥ /

「その[感受]は二種である。vyañjanāvagrahaと対象感受とである。そのうち、vyañjanaすなわち実体能力感官に接触した音声などの実体についての感受、すなわち判然としない把握がvyañjanāvagrahaである。」

		vyañjana = 感官	vyañjana = 対象	vyañjana = 結びつき	vyañjanāvagraha 複合語解釈
ジナバドラ	VĀBh 192-193			○	[感官と対象との] 結びつきについての感受
	VĀBhSV on VĀBh 192-193	○	○	○	[感官と対象との] 結びつきについての感受 感官による対象についての感受
ジナダーサガニマ ハッター	NSC on NS 49	○	○		対象についての感受 感官による感受
ハリバドラ	ĀNHV on ĀN 3	○	○		感官による感受 対象についての感受
	NSHV on NS 49	○	○		感官による対象についての感受
	TASHV on TAS I.18			○	[感官と対象との] 結びつきについての感受
シッダセーナガニ	TAST on TAS I.18			○	[感官と対象との] 結びつきについての感受
アバヤデーヴァ	SthAV on SthA 60	○	○	○	感官による対象についての感受 (結びつきについての感受には言及せず)
マラダーリヘーマ チャンドラ	VĀBhBV on VĀBh 194	○	○	○	感官による対象との結びつきについての感受 感官による対象についての感受
	JSV on JS62	○	○	○	感官による結びつきについての感受
マラヤギリ	NSMV on NS27	○	○	○	結びつきによる [対象についての] 感受 対象についての感受 感官による [対象についての] 感受
	ĀNMV on ĀN 3	○	○	○	結びつきによる [対象についての] 感受 対象についての感受 感官による [対象についての] 感受
	DhST on DhS823	○			感官による [対象についての] 感受
ティラカーチャールヤ	ĀNTV on ĀN 3	○	○		感官による対象についての感受
ジュニャーナサーガ ラスーリ	ĀNAva on ĀN 3	○	○	○	結びつきによる [対象についての] 感受 対象についての感受 感官による感受
マーニキャシェーカ ラスーリ	ĀND on ĀN 3		○		対象についての感受
ヤショーヴィジャヤ	JB	○	○		感官と対象との結びつき (avagraha)
	JA II.11	○	○	○	感官による対象についての感受 感官による感官と対象との結びつきについての感受
	TASVi on TAS I.18			○	[感官と対象との] 結びつきについての感受

ただし『ナンディースートラ』に対する注釈では、目下のvyañjanāvagrahaの注釈とは別の箇所において、vyañjanaに関する三つの解釈が与えられている。詳しくは佐藤 [1998b : 75-76] を参照せよ。

4. 終わりに

以上の資料より明らかになった点を以下に挙げる。

- ・ヤショーヴィジャヤによる三通りのvyañjana解釈の源泉はジナバドラの『ヴィシェーシャーヴァシュヤカパーシャ』にまで遡れることが明確になった。ジナバドラを源泉とし、それに従うハリバドラやシッダセーナガニらの解釈を統合した形で提示している。
- ・『タットヴァールタースートラ』に対する注釈に見られるヤショーヴィジャヤの解釈は、空衣派の学匠の解釈とは一線を画し、白衣派の学匠であるハリバドラ、シッダセーナガニの解釈に従うものである。ハリバドラが、ジナバドラの『ヴィシェーシャーヴァシュヤカパーシャ』に見られる解釈（「結びつき（接触）についての感受」）を『タットヴァールタースートラ』の注釈に導入していることは明らかである。
- ・avagrahaを「結びつき」とする解釈については、その源泉を遡ることはできなかった。このことは、avagrahaを「結びつき」とする解釈がヤショーヴィジャヤの独創であったことを示している。

略号および参考文献

- ĀNHV *Āvaśyakaniryuktivr̥tti* (Haribhadra Sūri) : Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4Vols., Āgamodaya Samiti Series nos. 1-4, Mehesana, 1916-17.
- ĀNMV *Āvaśyakaniryuktivr̥tti* (Malayagiri) : Śrī *Āvaśyakasūtram*. Vol.I. Śrī Āgamodayasamiti Series #56, Bombay-Surat: Āgamodayasamiti, 1928.
- ĀNTV *Āvaśyakaniryuktivr̥tti* (Tilakācārya) : See Parisiṣṭa 2 of ĀNAva.
- ĀNAva *Āvaśyakaniryuktyavacūr̥ṇi* (Jñānasāgara Sūri) : Śrī Mānavijaya (ed.), *Śrīharibhadrasūrikr̥tavṛtṭyanusāreṇa Bhaṭṭārakaśrījñānasāgarasūriviracitā Śrutakevaliśrībhadrabāhusvāmīsūtritaniryuktiyuta Śrī Āvaśyakaniryukter Avacūr̥ṇiḥ*. 2Vols. Śreṣṭhi Devacandra Lālbhāi Jainapustakoddhāre Granthāṅka 108, Surat : Śreṣṭhi Deva-candra Lālbhāi Jainapustakoddhāra Fund, 1965.
- ĀND *Āvaśyakaniryuktidīpikā* (Māṇikyāśekhara Sūri) : Śrī Mānavijaya (ed.), *Śrīmadbhadrabāhusvāmīpraṇītaniryuktiyutabhāṣyakaḷita Śrīmān Māṇikyāśekharasūriśvaraviracitā Śrīmad Āvaśyakaniryuktidīpikā (Prathamavibhāgaḥ)*. Ācāryāśrīmad Vijayadānasūriśvarājī Jainagranthamālā 16, Surat, 1939.
- DhSṬ *Dharmasaṃgrahaṇīṭikā* (Malayagiri) : *Śrīmad Haribhadrasūriviracitā Ācāryāśrīmalayagīpraṇītayā Ṭikayā Samalaṅkr̥tā Dharmasaṃgrahaṇīḥ*. 2Vols. Śreṣṭhi Devacandra Lālbhāi Jainapustakoddhāre Granthāṅka 39 & 42, Bombay : Śreṣṭhi Devacandra Lālbhāi Jainapustakoddhāra Fund, 1916, 1918.
- JA *Jñānārṇavaprakaraṇa* (Yaśovijaya Gaṇi) : *Savivaraṇaṃ Śrī Jñānārṇavaprakaraṇaṃ Śrī Jñānabinduaprakaraṇaṃ ca*. Śrī Jaina Grantha Prakāśaka Sabhā Granthāṅka 57-58, Ahmed-abad:Jaina Grantha Prakāśaka Sabhā, 1946.
- JB *Jñānabinduaprakaraṇa* (Yaśovijaya Gaṇi) : Sukhlal Sanghavi, Dalsukh Malvania and Hira Kumari Devi (eds.), *Jñānabindu Prakaraṇa of Nyāyaviśārada-Nyāyācārya Śrīmad Yaśo-vijaya Upādhyāya (with Introduction, Notes and Index etc.)*. Singhi Jain Series No.16, Culcatta: Babu Sri Rajendra Singhiji Singhi, 1942.
- JSV *Jīvasamāsavivaraṇa* (Maladhāri Hemacandra) : Śīlacandravijaya Gaṇi (ed.), *Śrī Śrutadharamaharṣibhir viracitaṃ Maladhāri Śrīhemacandrasūriviracitavivaraṇopetaṃ Śrī Jīvasamāsaprakaraṇaṃ*. Śrī Neminandana Granthamālā 15, Khambat : Śrī Jaina Grantha Prakāśana Samiti, 1994.
- JTBh *Jainatarkabhāṣā* (Yośovijaya Gaṇi) : (a) : Sukhlal Sanghavi, Mahendra Kumar and Dalsukh Malvania (eds.), Singhi Jain Series 8, Ahmedabad : Singhi Jain Granthamala, 1938. (b) : Vi-joyodaya Sūri (ed.), with Sanskrit Commentary Ratnaprabhā ṭikā, Ahmedabad : Jaśvantlāl Giradharlāl Śāh,1951.
- NSC *Nandīsūtracūr̥ṇi* (Jinadāsagaṇi Mahattara) : Muni Puṇyavijaya (ed.), *Nandīsuttaṃ by Devavācaka with the Cūr̥ṇi by Jinadāsa Gaṇi Mahattara*. Prakrit Text Society Series No.9, Varanasi-Ahmedabad:Prakrit Text Society, 1966.
- NSHV *Nandīsūtravr̥tti* (Haribhadra Sūri) : Muni Puṇyavijaya (ed.), *Nandīsūtraṃ by Śrī Devavācaka with the Vr̥tti by Śrī Haribhadracārya and Durgapadavyākhyā on Vr̥tti by Śrīcandrācārya and Viśamapadaparyāya on Vr̥tti*. Prakrit Text Society Series No.10, Varanasi-Ahmedabad:Prakrit Text Society, 1966.
- NSMV *Nandīsūtravr̥tti* (Malayagiri) : *Śrīman-Malayagiryācāryavihita-Vivaraṇayutaṃ Śrī-mad-*

- Devavācakaṅḁi-dṛḁdhaṁ Śrīman-Nandīsūtram*. Śrī Āgamodayasamiti Series #16, Surat : Āgamodayasamiti, 1917.
- SAS *Sarvārthasiddhi* (Pūjyapāda) : Pt. Phoolchandra Siddhant Shastry (ed.), *Sarvārthasiddhi of Pūjyapāda, The Commentary on Ācārya Griddhapiccha' s Tattvārtha Sūtra*, Jñānapīṭha Mūrtidevī Granthamālā : Sanskrit Grantha No.13, New Delhi : Bhāratiya Jñānapīṭha Publication, 1971.
- SthAV *Sthānāṅgavṛtti* (Abhayadeva Sūri) : Muni Jambūvijaya (ed.), *Sthānāṅgasūtra with the Commentary by Ācārya Śrī Abhayadeva Sūri Mahārāja*. 3Vols. Jaina Āgama Series No.19 (1)-(3), Mumbai : Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 2002-2003.
- TASHV *Tattvārthasūtravṛtti* (Haribhadra Sūri) : *Śrī-mad-Bhagavad-Umāsvātivācakovaryasaṁdṛḁdha-Svopajñabhāṣya-Bhagavad-Haribhadrasūriśvaraviracita-Ṭikayā Samalamkṛtam Śrī Tattvārthasūtram* /. Ratlam : Ṛṣabhadevji Keśarimalji Jaina Śvetāmbara Saṁsthā, 1936.
- TASṬ *Tattvārthasūtraṭīkā* (Siddhasena Gaṅḁi) : Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra*, Part I. Devacandra Lālbhai Jainapustakodhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.
- TASVi *Tattvārthasūtravivaraṇa* (Yaśovijaya Gaṅḁi) : *Śrī Tattvārthādhigamasūtram. With Auto-comm. Bhāṣya, the Vivaraṇa of Yaśovijaya, and the Gūḁhārthadīpikā of Vijayadarśana Sūri*. Bhavnagar : Suputrasakapuracaṁḁa Tārācanda, 1955.
- VĀBh *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣya* (Jinabhadra Gaṅḁi) : Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's Vīṣeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ah-medabad, 1966-68.
- VĀBhBV *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣyabrhadvṛtti* (Maladhāri Hemacandra) : *Śrījinabhadragāṅḁikṣamāśramāṇapādaviracitam Vīṣeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīhemacandrasūriviracitayā Śiṣyahitānāṁnyā Brhadvṛtṭyā vibhūṣitam*. Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā, nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39, Benares, 1911-15. (Reprint. Bhuvanabhānu Sūri, ed. *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣya*. 2Vols. Mumbai : Divya Darśan Trust, 1982.)
- VĀBhSV *Vīṣeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* (Jinabhadra Gaṅḁi) : See VĀBh.
- 藤永 伸
[1990] 「ジャイナ教の認識過程」, 『印度学仏教学研究』第38巻第2号, pp. (48) - (52) .
- 梶山雄一
[1975] 『論理のことば』, 中央公論新社, 東京.
- Karghatgi, T. G.
[1961] *Some Problems of Jaina Psychology*. Dharwar: Karnatak University.
- 松尾義海
[1942] 『インド論理学の構造』, インド文化研究所, 京都.
- 長崎法潤
[1988] 『ジャイナ認識論の研究』, 平楽寺書店, 京都.
- 佐藤宏宗
[1996] 「ジャイナ教認識論における接触知覚」, 『印度学仏教学研究』第45巻第1号, pp. (53) - (55) .

[1998a] 「ジャイナ教認識論における対象知覚」, 『印度学仏教学研究』第46巻第2号, pp. (74) - (77) .

[1998b] 「感官知に位置づけられる感覚 (avagraha) の対象」, 『ジャイナ教研究』4, pp.67-110.

Shastri, Indra Candra

[1990] *Jaina Epistemology*. Varanasi: P. V. Research Institute.

宇野智行

[2005] 「認識過程と想起—二人のヘーマチャンドラー—」, 『仏教とジャイナ教：長崎法潤博士古稀記念論集』, pp. 73-85, 平楽寺書店, 京都.

山口英一

[1991] 「ジャイナ教知覚論における到達作用説—アカランカ作 TAV ad TAS I, 18-19 和訳—」, 『伊原照蓮博士古稀記念論文集』, pp. 451-470.

-
- ¹ これら五知の訳語については長崎 [1988] に従っている。しかし、特にmatijñānaとśrutajñānaの訳語については再考の余地がある。
- ² JTBh 6:pratyakṣaṃ dvividham sāmvyavahārikam pāramāthikam ceti / (「直接知は、世俗的なものと究極的なものとの二種である」) 一方で、ウマースヴァーティ (5-6世紀) の『タットヴァールタ・アディガマーストラ』(Tattvārthādhigamasitra) では、直接知は独存知、他心知、直観知に、間接知は感官知と聖典知に分類される。
- ³ avagrahaについては、「感覚」[漠然とした知覚]「取得」など様々に訳され、さらにvyañjanāvagrahaやarthāvagrahaについても同様に「接触知覚」[〈不確定な対象〉の取得]や「対象知覚」[〈確定した対象〉の取得]などと訳されているが、本研究会では暫定的にavagrahaについては「感受」、vyañjanāvagraha「接触感受」、arthāvagrahaについては「対象感受」と訳している。これらの術語の訳の確定については今後の課題である。先行の訳については、長崎 [1988]、佐藤 [1998ab]、山口 [1991] 参照。
- ⁴ 資料蒐集については、都城高専の藤永伸先生および広島大学大学院の松岡寛子氏の助力があった。ここに記して謝意を表したい。
- ⁵ JTBh 7:matijñānam avagrahehāpāyadhāraṇābhedāc caturvidham / (「感官知は、感受、意欲、判断、保持という違いに基づいて四種である」) この認識過程については、宇野 [2005] 参照。
- ⁶ JTBh 7:sa dvividhaḥ vyañjanāvagrahaḥ, arthāvagrahaś ca / (「それは、vyañjanāvagrahaとarthāvagrahaの二種である」)
- ⁷ この点については、数々の研究が為されている。例えば、Shastri [1990] を参照。
- ⁸ Kalghatgi [1961] によれば、感官は実体感官 (dravyendriya) と精神感官 (bhāvendriya) の二種に分類される。実体感官はさらに実体形象感官 (nivṛttindriya) と実体能力感官 (upakaraṇendriya) に二分される。実体形象感官とは、実際の目や耳などの感覚器官である。その実体形象感官はさらに外的形象感官 (bāhyanivṛtti) と内的形象感官 (ābhyantranivṛtti) に分けられる。外的形象感官は生物に応じて異なる形をとるが、内的形象感官はすべての生物において同じ形をとる。そして聴覚内的形象感官はカダンバの花のように球状のものである。
- ⁹ 実体能力感官は、形象感官がもつ対象を把握する能力のことである。
- ¹⁰ tatrāvagraho dvirūpo grahaṇaṃ yad bhavati vyañjanārthayoḥ / vyañjanataś ca yad arthas tenādau takam vakṣye //
- ¹¹ vyajyate yenārtho ghaṭa iva dipena vyañjanaṃ tac ca/upakaraṇendriyaśabdādīpariṇatadravyasaṃbandhaḥ//
- ¹² 佐藤 [1998b] および山口 [1991] を参照。

【註記】

*本稿は、平成21年度科学研究費補助金・基盤研究（C）（研究代表者：宇野智行）の交付を受けて開催された、宇野智行博士（筑紫女学園大学）を中心とする研究会の成果の一部である。また宇野博士、佐藤宏宗博士、小林久泰博士からは草稿段階から多くの有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。

（かわじり ようへい：人間文化研究所 客員研究員）